

## 交流集会 2

### 「緩和ケアにおける倫理的ジレンマ」を担当して

北野 真実（石川県済生会金沢病院）

交流集会 2 では、「緩和ケアにおける倫理的ジレンマ」をテーマに担当させていただきました。

この交流集会を企画した理由は 2 つありました。1 つ目は、日本ホスピス・緩和ケア協会が掲げる“患者、家族の QOL の向上を目指す”という目標について、1 人の事例を通して、緩和ケアとは何かということについて、参加される看護師の方々と考えたいということでした。2 つ目は、その緩和ケアの定義を前提として、緩和ケアにおいて倫理的側面からこの事例を、Jonsen らによる「臨床倫理の 4 分割表」などを使って分析し、“何が患者、および家族にとって最善か”ということについて、考える機会を持つことをねらいとしました。

まず、WHO や日本ホスピス・緩和ケア協会の掲げる緩和ケアの定義、理念、基本方針及びホスピス緩和ケアを受ける条件、グリーフの意味やグリーフケアなどについて説明させていただきました。また、ケアの質の評価と改善に向けて、2006 年に J-HOPE 研究による【遺族による質の評価】を当院の緩和ケア病棟でも実施した結果について、80 名のご遺族の方々から貴重な意見や感想などをいただくことができましたので、紹介させていただきました。2009 年 7 月に広島で開催された日本ホスピス緩和ケア協会の年次大会でも、この J-HOPE 研究の結果が報告されており、その際全国における当院の緩和ケア病棟の位置づけや課題となる点などを改めて知ることができ、この貴重

な研究結果を交流集会に参加していただいた方々にぜひお伝えしたいと思いました。

これらの内容を踏まえた上で、“緩和ケア”という観点から、倫理的な側面における患者さんの意向、意志決定および配偶者の思いや医学的適応などについて、1 事例を通して整理してみたいと思いました。“医学的適応”における診断と予後、治療目標の確認や無益性について検討し、配偶者に説明し理解していただくことが、この事例の場合いかに難しかったか、またそのプロセスが遺される家族にとっていかに重要であったか、交流集会を通して改めて私自身が痛感した次第でありました。患者さん本人よりも配偶者の価値が先行している場合、4 分割の QOL の側面から“誰がどのように決定するのか”という点において、意見交換をぜひさせていただきたいと思っておりました。交流集会に参加していただいた方々とは時間の関係上、予定していた意見交換を行うことができず残念であると同時に大変申し訳なく思います。

この交流集会に参加して下さいました方々に心から感謝いたします。もし、何かご意見がございましたら、いつでも緩和ケア病棟にご連絡下さいましたら、大変うれしくありがたく思います。

参考文献：看護実践の倫理【第 2 版】、サライト・フライ、日本看護協会出版会、2005 年看護倫理、アン・J・ディビス、日本看護協会出版会、1997

## 交流集会 3

### 「新生児看護における看護倫理とは — 日常ケアにおける倫理を考えよう！ —」を企画・担当して

谷内 薫（金沢大学附属病院）

今回の新生児を対象とした倫理に関しては、「重篤な疾患を持つ新生児の治療」や「染色体異常を持つ新生児の手術をめぐる決定」など、社会

問題となっているような深刻な場面を想像される方がほとんどだと思いますが、今回は敢えて「日常ケアにおける倫理」に焦点を絞りました。新

生児と関わる際の「自分自身の心」と向かい合うことで、日常ケアの中にも必ず倫理が存在すること、存在しなければならないことに気づくことができることを期待し、テーマを選定しました。参加者がどのような職種であるかを事前に把握することが困難であったため、新生児との関りが無い職種の方でも理解しやすいように、「チューブ類のテープ固定」や「寝ているときのケア場面」を提示し、参加者自身が日ごろの自己の行動を振り返ることができるように進めていきました。

新生児は、言語的コミュニケーションがとれないだけでなく、セルフケア行動がとれないため、親あるいは、入院中であれば、医療者なくしては、生きていくことができません。そのような脆弱な子どもに対し、観察や治療目的で、裸で保育器に収容すること、気持ちよく寝ているところを無理やり起こしてオムツを換えたり、欲しがらるサインがないのにミルクを飲ませたり、泣いていても抱っこされずにおしゃぶりを吸嚙させられている場面を見受けることが多く、何の疑問も持たずになされているのではないかと感じるものがしばしばあります。子どもを一人の人間としての尊厳および権利を尊重するならば、このようなケアのあり方は適切なのでしょうか。意思疎通が図りにくい子どもから評価を得ることは困難であり、私たち看護師の自己満足でなされていることが、日常の中で数多くあるのではないのでしょうか。また、親に対する倫理とは何か、どのような関わりを持つことが望ましいのでしょうか。

上記内容を、子どもの特徴や背景を説明しながら問題提起した後で、参加者の皆様と2グループ

に分かれてグループワークの時間を設けました。しかし実際には15分弱の時間確保が精一杯であり、数人の方にご意見を頂いたのみで、グループ間での意見交換や全体討議はできませんでした。最後のまとめも、時間的余裕がなく、一方的な形となってしまいましたが、私自身の臨床での経験をふまえて、子どもに接する際には、何を大事にしているか、子どもは言葉で表現しなくても、別の形で必ずサインを示していること、自己満足のケアで終らせないための方法などを説明し、最後に子どもにとってのよりよい方法を考え続けることの重要性をまとめの言葉としました。参加者の皆様のご意見をお聞きすることはできませんでしたが、今回の交流集会在、少しでも今後の新生児との関わり方のヒントになってほしいと願うばかりです。

今年度より、新生児集中ケア認定看護師が県内で2名となり、今回の交流集会で、その役割や今後の課題などについて紹介させて頂く時間も得られたことに、大変感謝しております。

出生数が減少傾向をたどる中、低出生体重児を含めたハイリスク新生児の出生は、逆に増加傾向を示しています。日常の中での倫理だけではなく、前半でお伝えしたような、社会問題となっている倫理的な問題も、増加しており、さらに複雑化していくことが予測されます。まずは、子どもにとってよりよい方法は何か？子どもは何を言おうとしているのかを一人一人が考えることが大切であり、それが倫理的な視点ではないかと考えます。

最後に、参加頂いた皆様、コーディネーターを担当して下さいましたスタッフ皆様に、改めてお礼申し上げます。